

新たな世界観の芽生え



中村 哲

6

午前四時半、眠い目をしてりながら、日本人ワーカーと現地職員のリーダー格約五十人が作業場に向かう。アフラグン東部の山岳地帯、ダラエ・ヌール溪谷の診療所には「水源事業事務所」が併設され、二ツクラハル州北部の農村復興の根拠地となっている。ここから繰り出した二行は、作業地の中ほどにある倉庫裏ワシショップに行き、そそくさと朝食を取る。

一集まって、この近隣の農民六百人を分ける、つるはしやシャベルを渡し、ダンプカーにそれぞれ積載して六カ所の地区に送り出す。爆破班五チームは岩盤や巨石の処理に向かう。今年三月に始まった水路の掘削事業である。

今年も干ばつが依然として深刻だ。このため、わがPM



水源事業担う若者の挑戦

え、ダイナマイト爆破千四百回、身長十六のうち三、五の掘削を完了した。計七、八が岩盤治いの工事で、小さなトネル二十カ所、水漏漏味方の識別ができる。一サブマシンが含まれる。私たちにしては大工事だ。

午前五時半、作業が開始される。五〇度を超える炎天下、十時の休憩まで休みなく、皆働く。山の農民たちは屈強で、まさかと思えるくらいに巨石もハンマーで粉砕してしまふ。取水口から一地点の岩山は、爆破・掘削で形が変わってしまった。

農民たちは、伝えられる政治的動きとは無縁である。作業現場を見ているとよく分かる。ここには表層の報道とは無縁に、アフラグン社会の脈の動きがある。元々、タリバン政権下の者が現場監督をし、新政権の要人・関係者が激励にくる。旧タリバン兵、元北部同盟兵、果ては元

米軍師兵に至るまで和気あいあい、共に汗を流す。この複雑怪奇な人間関係を読み取るのは至難の業で、米軍は敵味方の識別ができる。ジャーナリストも困惑する。

しかし、一歩彼らの中に入れば、ことは非常に簡明だ。まず自ら生きることなのである。政治スロウガンなど、備兵にでもならぬ限り食えない身には、どうでもいいことである。外国人は適当にあしらって、頼りたくない。村を侵す者には一致して戦い、心からの協力者なら、外国人であっても、客人として命懸けで守る。

最近感ぜられるのは、これら若者たちの間で胎動する新しい動きである。本人たちには失礼だが、日本社会で満たされず、自分の生き方に行き詰まりを感じ、現地で生きがいを見いだそうとする者が少なくない。適切な場所を得れば、別人のように生き生きとなつてゆく。一世代前のような野心や功名心、欲望は薄いが、まるで向かへた航えた者のように、現地に惹かれてゆく。



飲料水確保や灌漑事業用の水源、クナール川

「アフガニスタン」を通じ、彼らの心にとどめてゆく。それが日本で失われたものなのである。日本の状況は、富沢賢治が七十年前に書いた「津文の多いい料理店」である。西洋から来た紳士が山中で迷い、立派な西洋館に遭遇して喜ぶ。中に入ると、賑やかな金文字で、金物を取ってくださいます。服を脱いで体を洗ってください。体中にクリームを塗ってください。と次々と注文が出される。土壇場になって、自分がつて食われる準備だとなつて、恐怖で狼狽したところ、地元者が現れて、犬がはえ、猟師が「だん

なあ、だんなあ」と呼び掛ける。実は立派な西洋料理店は幻で、林の中で勝手に金文字に踊らされて、裸になつて震えていただけなのだ。

今、「文明の辺境」なる現地から見れば、このさまがはつきり分かるのである。ニューヨーク・多発テロ以降、「文明」は凶暴化し、「選れて貧しい」者を力て屈服人間を殺す、奇怪な論理が横行している。だが、これはより複雑な形で先進国内部をむしばむものと軌を一にしている。だがそれもまた、じじは実体のない「罫」におびえているにすぎない。

多感な青年たちは心のどこかで、それに敏感に気付き始めているのだ。たとえ反戦を叫ばなくとも、それがそが貴重なものである。私たちの現地事業が若者たちを解放して、真に根源的な世界観が芽生え始めている。それは単なる過去への郷愁ではなく、新しい世界を切り開くための模索である。

(医師・ペンシャール会現地代表)

日本が失ったもの「文明の辺境」で学ぶ

「ペンシャールから沖縄へ」は毎月第4日曜日に掲載されます。